

## 連載 情報システムの本質に迫る 第 89 回 Web 社会－日本

芳賀 正憲

Web 社会というと、通常はインターネットの発達した現代社会のことを想定します。しかし、戦中および占領期から独立後にかけての日本をよく知るジャーナリストのフランク・ギブニー氏は、1953年出版の著書『日本の五人の紳士』の中で、当時の日本を Web (クモの巣) 社会と名づけています。

ギブニー氏は、エール大学卒業後海軍に入り、日本語を研究して戦時中は日本人捕虜の尋問に当たり、佐世保にも進駐しました。その後タイム社に入社、東京支局長などジャーナリストとして活躍ののち、ジョンソン大統領のスピーチライター、百科事典(ブリタニカ)の刊行などにも従事、70年代末以降は大学教授、研究所長としても日本関係の多くの論文・著書を発表しています。『日本の五人の紳士』は、戦時中の想像を絶する残虐行為など、国際社会に理解されにくい、日本人とその社会の複雑な全体像を、米国人にも日本人自身にも伝えるべく書かれた、ギブニー氏28歳の労作です。

ギブニー氏は、優れた日本文化の魅力に若くして虜になり、日本を第二の故郷と思っているのですが、しかし大変に親切で礼儀正しいかと思うとひどく残酷だし、やさしい詩歌を詠むかと思うと、憎むべき戦争を始める、国際的コミットメントへの熱意もあるのに、世界の人々が怒る内向きの国民心理がある、このような矛盾をどのように考えたらよいか解明したいというのが、日本研究の動機でした。

もちろん彼は、外国人に日本の内情が分かるのかという懸念には十分配慮した上で、フランスのトクヴィルが米国の民主主義と政策に関して米国人にもなし得ないほど優れた著作を著したように、日本社会の実像を客観的に描き出して日本人にも示唆を与えたいという高い志で分析に臨んでいます。

分析に際して彼は、題名にもあるように、典型的と考えられる5人の日本人を選び出しました。今でいうペルソナ分析です。

ペルソナとして選ばれたのは、次の5人です。

- (1) 天皇裕仁
- (2) 新聞記者・山崎忠夫
- (3) 製鉄会社職工長(伍長)・木瀬秀哉
- (4) エンジニア・元海軍中将・清水文夫
- (5) 農業・村の有力者・真田佐嘉次

今の目で見ると、産業の推進に責任をもつ企業経営者、人口的に多くを占める零細な労働者や農民、戦前から戦中、日本の針路に重大な影響を及ぼした国家主義者など、ペルソナとしては不足しているようにも見えます。しかしユニカルチャーの日本で、立場も経歴も大きく異なる代表的な 5 人を詳細に分析することにより、日本人とその社会の普遍的な特質は十分解明可能であり、その試みは成功していると思われま

す。ギブニー氏が驚いたのは、5 人についてよく知ると、それまで外国人が抱いていた固定的な日本人像に当てはまる人は一人もいなかったことです。各地の戦場でバンザイ突撃をして玉砕したり、中国や東南アジアで捕虜や婦女子にまで残虐の限りをつくした同じ日本人であるとは想像することさえ不可能でした。(これらの行為は、国内の日本人が知る以上に、外国には詳しく伝えられていたと考えられます。ギブニー氏のこの著書にも、米陸海軍合同報告書に載った「フィリピンにおける日本軍の残虐行為」に関する記事が、細かい活字で 1 ページにわたり引用されています。このような残虐行為が、44 年以降日本国内へのやはり残虐といえる空襲や原爆投下に結びついたのでないかという疑念がぬぐいきれません。日本の兵士は、残してきた家族がやがて被るかもしれない行為を、現地で続けていたのです。)

ギブニー氏が代表的と考えた 5 人の日本人は、立場や経歴が大きく異なるにもかかわらず、多くの共通の性格をもっていました。よく働く、まじめに問題に取り組む、自らの責任に対して信じられぬほど忠実、ただし新しい責任をとることには熱心でない、規律について強い感情をもつ、家族と社会に対する忠誠感が深い、それほど信心深くないが恩義には報いる、ユーモアのセンスをもっているが繊細というよりむき出しである、ことなどです。

実はこれらの性格を列挙しても、日本人を真に理解したことにならないとギブニー氏は述べています。日本の社会基盤として、最も注目しなければならないのは、日本人が、西欧では常識になっている伝統的・絶対的な価値体系－プラトン主義とキリスト教の遺産のような－をもっていないことであり、日本語には「善と悪」という概念の根源となる語がないとギブニー氏は指摘しています。

新聞記者の山崎氏とエンジニアで元海軍中将の清水氏は、高等教育を受けていて、これらの価値体系を学び、知識はもっています。しかしその知識が、日本社会の伝統を形づくる上で役割を演じることはありませんでした。

村の有力者の真田氏は、息子が小さいときから、畑に行く道など日常生活の中で、世渡りに必要な道徳のおきてを教えていました。そのおきての基礎は、敬神や抽象的な誠実・純粋さなどではなく、人間関係における「信用」ということでした。日本のタテ社会で行為のよい悪いは、行為者とそれを受けたものとの、場合々々の状況による関係次第です。日本人の倫理は抽象的な美德ではなく、そのような人間関係、一種の社会的契

約に基礎をおいています、最高の美德は、約束に忠実なこと、「信用」できると評価されることです。

この契約や約束の組織が、日本社会のあらゆる部門を通じて巨大な鋼鉄のクモの巣のように張りめぐらされているというのが、ギブニー氏の重要な発見です。このクモの巣があらゆる方向から個人をしばりつけています。しかし日本人が安定を見つけられるのは、このクモの巣の中で平衡状態に達することができた場合だけであり、万が一クモの巣から脱落すると、そこには大変な苦境がまっています。

日本人が個人として、西欧に生まれた者と異なるところは、自分自身の権利をもった人間、少なくとも神から与えられた自然の権利と義務という伝統をもち、ただ正しい権威に対してのみ責任をもつという、そういう人間ではなかったことであり、日本人はその家族、共同体、国家の一員としてのみ生きてきたというのが、ギブニー氏の認識です。日本では神々さき善でも悪でもなく、ただその神が共同体の深い感情を代表しているがゆえに尊ばれるとしています。

これに関連してギブニー氏は、法社会学者・川島武宜氏が1948年に書いた次のような言葉を引用しています（要約）。

「家族制度のような社会関係で、人間関係において、「個人的責任」という観念がそこでは存在し得ない。そこでは、服従者の行動はつねに他者によって規定される。」

代表的な日本人5人のうち、クモの巣に最もがっちりとりえられているのは、村の有力者・真田氏です。しかも彼は、そこに最も安住しています。彼の部落における地位は、橋や隣人の家の修理、田植えや刈り入れの手伝いなど、共同体に対する貢献の高さによって維持されています。

製鉄会社職工長・木瀬氏も、真田氏に負けないくらいクモの巣にとりえられています。1つは社宅の隣保関係であり、祭りや道路の補修などに貢献するとともに、結婚の世話をしてもらっています。あと1つは職場の関係であり、部下の面倒を家族も含めてみると同時に、自らも上司から見てもらっています。

エンジニアで元海軍中将の清水氏、新聞記者の山崎氏は都会に住んでいて、クモの巣の影響はずっと少なくなっていますが、もちろん逃れることはできません。清水氏は海軍工廠司令官だったとき、空襲で部下とその家族を死傷させ、しかも個人的に（財力がないので）あとの面倒をみてやれなかったことに、強い責め苦を感じています。

新聞記者の山崎氏は、クモの巣社会打破の動きに最も近づいている人間です。その考え方はリベラルで、米国人にも理解しやすいものです。しかし、その彼にも会社や社会のクモの巣はかかっています。彼は社会改革の志はもっているのですが、クモの巣のため行動には至っていません。

このクモの巣社会の中心に天皇がいるというのが、ギブニー氏の考えです。

1953年においてもギブニー氏は、天皇は単なる象徴ではないと見ています。日本

では国家と家族制度が複雑に結びついており、天皇は、この強固なタテ社会の契約に道徳的承認を与え、クモの巣社会が永久不変であるとの認め印鑑を押す 1 つの制度であると述べています。

この天皇を中心としたクモの巣の存在こそ日本の現代史の中心であり、これによって日本人は現代の最も大きな国家変貌の中で一体となって動くことができました。それと同時に日本人は、指導者たちが、国家を自分たちの目的のために支配し動かすにはどうしたらよいか、巧妙な手段を見つけ出したとき、その術中に陥ってしまいました。

外国人から見たときの日本人の特徴的な性格、礼儀正しさ、生真面目さ、それに残虐性などは、クモの巣社会の副産物として説明ができます。

日本人は外国人から、世界で最も礼儀正しい国民と評価されていますが、これは生活というものが、他人との関係をいかに処理していくかにのみかかっている社会によってもたらされました。それは言葉にも表れていて、フランス語は気分や感情の表現にデリケートですが、日本語の場合、社会的な上下関係など人間関係を反映した微妙な言葉づかいがなされています。

クモの巣社会にとらえられ安住した中で、日本人は模範的にふるまいます。責任を負わされたら忠実に遂行します。しかし新たな責任が加わることは、極力避けようとしません。それだけでなく、まわりから課されている責任の負荷が重いからです。電車などで事件に遭遇したとき、見て見ぬふりをする日本人が多いのに外国人は驚きます。これは冷淡だからではなく、関わりあいが生じて新たに責任が増えるのを避けるためです。

一方で日本人は、自分が定着しているクモの巣の場所から離れるにしたがって自制心を緩めていきます。日頃の束縛の反動で、はめを外す気持ちが働いてきます。有名なことわざに「旅の恥はかきすて」というのがあります。

日本人がクモの巣社会の定めのおよばない状況におかれたとき、抑圧され鬱積した破壊感情が一気に爆発します。1931年から45年にかけて。日本が中国やアジア各地で行った残虐行為はこのようにして起きたと、ギブニー氏は述べ、フィリピンでの具体的な事例を軍の報告書にもとづいて記しています。

ギブニー氏の指摘は1953年になされたものですが、今日の日本文化の根っこの構造を明らかにしたものとして注目され、そこから示唆されることは非常に多くあります。

基礎情報学で社会は、心的システム、社会システム、マスメディアシステムなどの階層的自律コミュニケーション・システム（HACS）からなるとされています。各システムは互いに影響しあっていますが、例えば心的システムは環境となっている社会システムから程度の大小はあっても拘束を受けます。クモの巣社会では、この拘束が極端に大きいものになっていると考えられます。これはまさに法社会学者・川島武宜氏の言う「個人的責任という観念が存在し得ない、服従者の行動はつねに他者によって規定され

る」世界です。

特攻を志願した若者について、国を思う気高い心で命をささげたと、その偉大さを現代の若者に説き続ける政治家がいます。しかし志願者の意思決定が、心的システムへの国家と軍による強い拘束のもとに行われたとしたら、彼らを讃えることはむしろ欺瞞であり、現代の政治家としては、数千人の若者を死地に追いやった制度や政策をこそ言説の対象にすべきでしょう。

また、西欧では常識になっているプラトン主義やキリスト教の遺産のような絶対的な価値体系をもたない強固なクモの巣社会は、イノベーションや改革に対する、岩盤にも匹敵する抵抗勢力になります。創造活動は、個人の発想が起点になりますが、クモの巣社会では心的システムに強い拘束がかかっているからです。工業製品のように、組織からある程度独立して客観的に認識できるものはまだよいのですが、情報システムのように、契約や約束がクモの巣のように張りめぐらされ、互いに自己充足していて、外には確固とした目的や基準をもたない組織と社会そのものが対象の場合、その開発は著しく困難なものになります。

その困難な課題に挑戦して解を示すことこそ、新しい情報システム学の役割です。情報システム学会は、欧米の情報関係の学会に比して、はるかに複雑で高度の使命を担っていると言えます。

この連載では、情報と情報システムの本質に関わるトピックを取り上げていきます。皆様からも、ご意見を頂ければ幸いです。